第16回地域歷史散策

いざ鎌倉へ一岩瀬・今泉を抜けて一

秋・冬の催し物の ◇日時: 令和3年11月27日(土) 9時45分~16時 ◇集合: 横浜市栄図書館前(集合)

> ◇対象: 中学生以上(健脚向きです) ◇人数: 25人(応募者多数時は抽選)

〉費用: 500円(資料·保険代)

>申込: FAXか往復はがきに**行事名**「地域歴史散策16」**・住所・** 氏名(ふりがな)・連絡先(FAXの場合はFAX番号も記入)・申込人数・ 「埋文よこはま」44を見た旨を記載し、埋蔵文化財センターへ

〉募集期間: 令和3年10月15日(金)~11月15日(月)必着

 $\rangle\rangle$ event 2

サカエスタ開所・横浜市立図書館100周年 記念講演会

栄の遺跡

鹿島保宏(調査研究員)

日時: 令和3年12月4日(土) 14時~16時

会場: SAKAEST(サカエスタ) 大会議室

〉人数:50人(先着順)

申込: 令和3年11月11日(木)9時半~ 栄図書館窓口か電話

(045-891-2801)

講演会《和郑度講座》〉〉〉event

金沢区の考古学

-野島貝塚と中世の「やぐら」-浪形早季子(調査研究員)

〉日時: 令和3年12月18日(土) 13時~14時半

〉会場: 金沢地区センター大会議室 (金沢図書館併設)

◇人数: 40人(先着順)

〉申込: 令和3年11月19日(金)9時半~ 金沢図書館窓口か電話

(045-784-5861)



山寨内

車載カメラの撮影動画からAI(人工知能)で路傍の石仏や石造物を検出する技術を開発

合同会社ミドリアイティ(本社:横浜市緑区、代表:小池 隆氏)は、車載カメラで撮影した動画からAI(人工知能)で路傍の石仏や石造物を検出 する技術を開発し、その所在をデータ化しています。「石塔・石碑」、「石祠」、「五輪塔」、「石灯籠」の4種を識別し、刻像については、「地蔵菩薩」と 「如意輪観音」の2種を検出、文字についても「庚申」「道祖」「馬頭」 「甲子」「地神」「念佛」「夜」の7種を検出できるそうです。

また開発者の小池氏は篠田浩輔氏(國學院大學)とともに石塔類の3Dデータにも取り組んでいます。路傍や寺社にある庚申塔や道祖神など の石仏・石造物をフォトグラメトリで3Dモデル化し、オープンデータとして公開しています。この他にもTwitterを活用した市民参加型の石造物 調査プロジェクトで月待塔のオープンデータを作成・公開するなど、今後の新しい文化財保護としても大いに期待されます。





石塔類の研究には民俗学の分野から、熱心な研究が行われてきました。そこで、長らく横浜市歴史博物館において民俗学を牽引してこられ た岸上興一郎さんと、現在歴史博物館の民俗学専門の学芸員かつ埋文セシター(考古学)の新しい課長に就任した刈田均課長の2人に横浜市 内の石塔類について解説していただきます。入門編として、とてもわかりやすい動画になっています。YouTube/埋文HPにて順次公開予定!

> ★ 道祖神塔ってなに? 横浜の石塔をめぐるvol.1 庚申塔ってなに?





今回は以前から要望の多かった石塔類の特集です。コロナ禍の中、気分転換や運動不 足解消などから、近所を散策する方が増えたのではないでしょうかの編者の家の前も古 道ということもあり多くの人が行き交い、そこにある、石塔類や塚などに足を止める方 も多くみられます。皆さんにとってもっとも身近な文化財が、もしかしたらこうした石 塔類かもしれませんの改めて、周辺を散策するとひっそりたたずむ石塔類が目に飛び込 み、新たな発想が生まれるかものそんな期待を込めて今号を皆様に送ります。 編集N







twitter #Yokohama_Maibunで検索

≪埋蔵文化財センターのご案内≫

👱 👱 🛂 利用案内

(団体利用:事前申込)※栄区郷土資料室併設

*** * *** アクセス

📃 JR 根岸線「港南台」駅 💆

2番バス乗り場より神奈中バス「上郷ネオポリス」行きまた は「栄プール」行きに乗車、「上郷ネオポリス」下車徒歩1分

■ 京浜急行線「金沢八景」駅

金沢八景駅前3番乗り場より「上郷ネオポリス」行き、終点「上 郷ネオポリス」下車徒歩1分または神奈中バス「大船駅」行 きに乗車、「長倉町」下車徒歩7分

■ JR線「大船」駅

3番乗り場より神奈中バス「金沢八景駅」行き に乗車、「長倉



公益財団法人 横浜市ふるさと歴史財団 埋蔵文化財センター 〒247-0024 横浜市栄区野七里 2-3-1

TEL. 045-890-1155 /FAX. 045-891-1551 https://www.rekihaku.city.yokohama.jp/maibun

埋文よこはま 44

発 行 日 2021年9月30日

編集・発行 (公財)横浜市ふるさと歴史財団 埋蔵文化財センター

刷 株式会社ナデック

「埋文よこはま」は横浜市域で発掘調査された遺跡や出土

市内の学校・図書館・区役所などで入手することができます。 バックナンバーについては埋文センター HP からもダウン





横浜の石塔中世・近世編

中世の石塔~五輪塔、宝篋印塔、板碑













1・2 上の山遺跡〈都筑区〉 3~7 上行寺東やぐら群遺跡〈金沢区〉

1 墓地中央広場 2 五輪塔と板碑出土状態

3 21・22・23号やぐら 4 19号やぐら玄室西側五輪塔レリーフと納骨穴(手前)

6 15~18号土坑墓 7 18号やぐら右奥壁側の石塔類出土状態

石塔とは石製塔婆の略であり、塔婆は古代以来、死者の追善供養のためにたてられたものです。中世に入ると 石塔は急増し、供養のための供養塔や墓塔のみならず、悪霊鎮めや雨乞い、病気平癒などさまざまな造立目的 が加わります。代表的な石塔に、中世の五輪塔や宝篋印塔、板碑、近世の庚申塔や道祖神、馬頭観音などがあり ます。庚申塔をはじめ、現在でも市内各地でみられるこれらの石塔は、地面に埋もれた遺構や遺物と比較すると、 身近な文化財と言えるのではないでしょうか。

石塔の研究は比較的古く、長い歴史を持っていますが、1960年代以降に埋蔵文化財の緊急発掘調査が急増 し、出土品を中心とした遺物の研究が盛んになると、石塔の研究は下火になりました。金石文を豊富に持つ板碑 は、比較的熱心な研究が行われてきましたが、それ以外の五輪塔や宝篋印塔についても、近年、中・近世の考古 ※1金石文とは金属や石など耐久性のある素材に記された文字資料のこと。 学の情報集積により各地で報告されています。

上の写真は都筑区上の山遺跡と金沢区上行寺東やぐら群遺跡にみられる石塔です。上の山遺跡からは西中 世墓地を中心に57基もの板碑が出土し、紀年銘から約1世紀にわたってこの墓地が営まれていたことがわかっ ています。また上行寺東やぐら群遺跡からは44基のやぐらが検出されており、同じく紀年銘が彫られた石塔や陶 器、かわらけなどの遺物から、やぐらが構築され機能していたのは14世紀中頃~15世紀第2四半期までの約 100年間と考えられています。

※2 やぐらとは中世に崖などに掘り込み造られる墓。『埋文よこはま』38参照。

中世の石塔

stupa in medieval times

中世の造塔には、経典を中に納める法身塔、遺骨を納める献身舎利塔など、 さまざまな趣旨がありました。「塔を建て納骨する」行為の背景には、地獄に堕 ちるのを止め、極楽往生させるという破地獄思想があります。この造塔思想の 典型例として宝篋印陀羅尼経があり、宝篋印塔という塔型が完成しました。

五輪塔や宝篋印塔の継ぎ目に小穴を穿ち納骨する行為は、塔に舎利を納めることによって成仏できるという観念の 表れであり、一人のみならず、追葬や合葬が行われています。

五 一輪塔

空風輪はくっ ついているの で、4 石での 構成ですの 全体を1つの 石で作る「一 石五輪塔」も 五輪塔と併行 して造立され ますの







ア

塔全体が大日如来の抽象化されたもの(大日如来の三昧耶形として造立)。 このため、仏像は刻まず、各面に四門の梵字を刻む。

・「方形・円・三角・半月・宝珠」の 5 つを下から上に積み重ねた形の卒塔婆。 ここに「地・水・火・風・空」の五大元素を重ね合わせる。 他の塔と異なり、塔身がない。

- 4 石を組み合わせる構造で、結合方式は空風輪に出ホゾ、火輪にホゾ穴を 有する以外は、積み重ねるのみ。
- 分布は全国にわたり、宝篋印塔の数をはるかに超える。
- ・日本で石造化。 瓦質五輪塔 (天養元年(1144))が兵庫県極楽寺の経塚にある。 最古例は岩手県平泉釈尊院の仁安四年(1169)塔。
- 出現期の12世紀後半には、宗教的行為の供養が造立の主要目的。
- 造立数が増加する13世紀後半からは人の死に関する性格が顕著となる。 一般的に供養塔から墓碑への変化が指摘(初期は偉いお坊さん向けの個人墓) 13世紀後半以降も①追善・逆修供養関係と②墓碑が共存する場合もある またこの時期、主要な葬法が土葬から火葬へと大きく転換する。

【五輪塔出土事例】

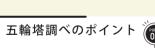
〈上行寺東やぐら群遺跡〉

金沢区

| 14~ | 6C に造られた遺跡。上・中・下段 の海蝕崖に「やぐら」が確認され、建物や池、 井戸の跡や土坑墓などが検出。やぐらは廃絶 後も「やぐら利用墓」として使用。長期間にわ たり墓域として土地利用された。

石塔類は五輪塔や五輪塔各部位、宝篋印塔 各部位、板碑などが出土。五輪塔の地輪や水 輪には納骨穴が穿たれ、内部に火葬骨を充填 するものもある。五輪塔の多くは凝灰岩製で、 少ないながら安山岩製のものも出土。

金沢区 6基の横穴墓が検出され、そのうち4号横穴 はやぐらとして転用か。内部平坦面に3基の五 輪塔、その両側に転倒した五輪塔各部位が散 乱した状態で出土。先端部からはカワラケが 出土。五輪塔は地輪の数より5基と考えられ、 安山岩製のもの以外に、大型の凝灰岩製の五 輪塔もみられる。板碑は5片出土。



【サイズ】鎌倉時代大→室町時代小。

【形態】新しいものの方が直線が増す。

【梵字】時代が下がると梵字は小さくなる。 【空輪】新しくなると頂部が突出するものもある。

【火輪】室町時代では軒端が徐々に外に開く。

【地輪】室町時代になると高く縦長になる。

鎌倉及び周辺では

一般的に

【水輪】 畿内の律完系巨大塔の水輪は球形に近いが、 鎌倉展開以後の巨大塔は上下から押しつぶされた様な形に、



【上行寺東やぐら群遺跡】 **a** 22号やぐら上段右室(龕がん)

- 五輪塔・蔵骨器(水輪にも納骨穴) **b** 阿弥陀如来坐像レリーフと
- € 17号やぐら五輪塔各部位集積と 古瀬戸灰釉四(三)耳壺出土状態

22号やぐら石塔類出土状況

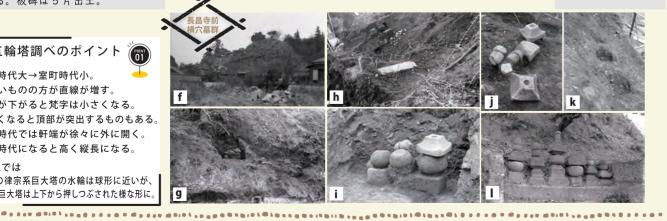
- d 43号やぐら地輪納骨穴内火葬骨
- 26号やぐら地輪納骨穴内火葬骨

.......... 【長昌寺前横穴群】

f 全景(北西から)

g~k 4号横穴

- 9 遺構と周辺
- h 崩落十中の出土板碑
- i 出土五輪塔(前庭部より)
- 前方の倒壊五輪塔
- k 納骨穴(左写真五輪塔撤去後)
- ■国道16号線敷設時出土の石 塔群(東富岡バス停前(当時))



〈関東型式〉の特徴

・請花の蓮弁は上下とも 素弁。※3

・軒上には5段の段型の 最上段の段型側面は輪郭 を巻き、中央に束を立て、 7万に分け、路盤を表現の ・軒下には2段の段型の ・隅飾突起は内側が 2 弧 で、側面は各面で輪郭を 底部にまで巻く。

・側面は輪郭を巻きし区の ・区内に禁字を刻む場合 は金剛界四仏の種子の ・梵字に目輪(がちりん) をつけない。

・上部に2段の段型の ・側面は輪郭を巻き、中 央に束を立て2区に分け るの・銘文を刻む場合は、 基礎の側面区内に刻む。

関東型式では必須部分の すべての塔に備わる。 上部反花は複弁の 一切4年、全17年。

両隅蓮弁は斜行の 側面も輪郭を巻くの 中央に束を立て2区に分割の 格狭間を刻む場合は反花座 側面区内に刻むの

【宝篋印塔出土事例】

鶴見区

宝篋印塔調べのポイント 一般的に

ほうじゅ

ぬび篠首

請花

がばな

笠か路盤

隅飾

軒

宝

篋

印塔



一蒲弁

【基礎】古いものは背が低いものが多い。

【塔身】古いもので背を高くしたものがある。

【笠】鎌倉後期は背が適度に高く反り、軒口は厚い。それ以前は背が低く、左右に 良く延び、軒は全体に反り曲線はおだやか。隅飾が垂直に近いほど時代が古い。 【相輪・宝珠】鎌倉後期では相輪の刻出がはっきりし、室町時代頃から九輪部が 上方で細くなる。宝珠は新しくなると頂部が突出するものもある。

イラスト:諸川摩美

【蓮弁・格挟間】時代鑑別の重要な部分。蓮弁は南北朝頃から退化 (P.5 参照)。 【梵字】南北朝頃から梵字は小さくなる。

【上座】徳の優れた修行僧あるいは教団の長老を称す。 a A群と前庭部

b A-2号横穴墓石塔類出土状況

な違いがある。

c~e A-1号横穴墓 c 板碑全景(玄室内部より) d 貝層とウシ寛骨 e 玄室内溝(板碑基部残る)

平面方形の一重の塔。

笠四隅に隅飾の突起を造り、笠上部は数段の段型とする。

密教系の塔で鎌倉前期からみられる。やがて宗派をこえ、

本来『宝篋印陀羅尼経』を納入する塔だが、多くが供養塔婆。

願文から、追善供養塔、逆修塔、墓塔の3つに分けられる。

造立者が造塔思想により、特定の人を供養する追善供養塔

経の納入に関わらず、この形式の塔を宝篋印塔と呼ぶ。

源流は中国。インドの阿育王が八万四千塔を造塔したと

いう故事に倣い、呉越王銭弘俶が金属製塔(金塗塔)を

「関東型式」と「関西型式」があり、反花座と基礎に顕著

関東圏では相模、特に鎌倉市内での造立が多い。

【○○禅門,禅尼】最も多くみられる。「○○禅定門」の略。

修行を経て授けられ、仏の弟子を証明する戒名の一種。

【〇〇比丘, 比丘尼】出家し、具足戒をうけた修行僧と尼僧。

【〇〇居士,信女,大姉】在俗の仏教信者の戒名につけた称号。

【沙弥○○】出家しているが、まだ一人前の僧侶でないものを示す。

【律師○○】僧尼を統括する官職であったものが、称号として用いられた。

石塔の主流の一つとして五輪塔と並び流行。

各国へ送ったのが始まりとされる。

宝篋印塔調べのポイント

【〇〇法印,禅師,和尚】僧位の一つ。

【大檀那,大担那,大旦那〇〇】信徒を指す。

【阿闍梨○○】称号として用いられている。

【○○庵主】僧庵の主人といったような意味。

f~n 1号やぐら f·g·h 遺物出土状況

i 塔身図・梵字 j~n 宝篋印塔(j相輪,k笠,l塔身, m 基礎, n 反花座)

刻まれた

銘文上の法名

武士の在俗出家者が

^{危乗}る場合も多い

を見てみよう















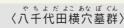




まつうらだいどう 〈六浦大道やぐら群〉

金沢区

15 基のやぐらが検出され、上下段にわたり分布。残存状態 は良好でなく、上部やぐら構築後に下部にやぐらを構築する際 に、前面の平場や参道を切り崩して切岸を設けている例もある。 石塔類の大半は | 号やぐらと 2 号防空壕に詰め込まれてい る。また人骨も 40 体近く出土している。3 号やぐらでは地輪 納骨施設内に人骨と獣骨が一緒に埋納されていた。



横穴墓転用のやぐら内から板碑を中心とした石塔類が多量に出土。特にA - 1号横穴墓では、羨門部から玄室の両側壁に沿い小型の板碑列があり、左 部床面中央には方形の掘り込みがあり、焼骨粉出土。A-2号横穴墓で井桁 状に組んだ小形板碑や宝篋印塔の部材がかためておかれ、骨類も出土。

※1 密教で仏を表す象徴物。 各仏の象徴物は経典で予め 取り決められ、各仏の持物 がそのままその仏を象徴。 大日如来は宝塔で表す。

※2 逆修とは、未来に訪れる ※3 「素弁」…「花弁の中に何もないもの」 「死」後、極楽往生や成仏 を望み、生前に仏事を行 うこと。この場合は、生 前に石塔を造立すること

「単弁」…「花弁上に子葉をのせたもの」 「複弁」…「単弁二つが並結した花弁」

北条実時公御廟



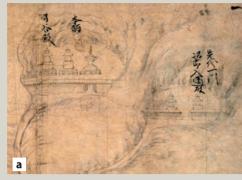
Why don't you go on a historical walk trip?



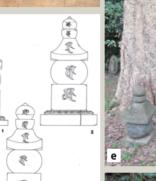


国史跡 称名寺北条家御廟 五輪塔、宝篋印塔 (金沢区金沢町)

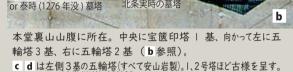
境内には五輪塔を中心とする中世石 造物が各所に点在。重要文化財『称名 寺絵図』の背紙には称名寺第3世長老 湛睿の筆とされる元亨 3年(1323)の朱 線の結界文が墓地や骨堂等を避けて、 清浄な区域を囲んでいる。朱線外には 6か所に五輪塔・宝篋印塔・板塔婆等が 描かれ、墓域であることが示されている。











1815-1816年に金沢大蔵少輔千秋(金沢北条氏後裔、佐渡奉行のち長崎奉行)

により整備。3→6基へ増加(他所より移設(右2基と宝篋印塔左隣 1基)。

北条貞顕・顕時公御廟

の墓塔 (供養塔)(再建塔)

境内南西部墓所、東側に貞顕公、西側に顕時公廟。 前者 e は前面に石敷を伴う五輪塔を中心に形成され、周囲 に中・小型の五輪塔と宝篋印塔をあわせた || 基と燈篭の 竿がある。後者も同様に石敷きの参道を伴う五輪塔 f を中 心に形成された墓所であり、左右に五輪塔が配置。

a 「称名寺絵図並結界記」より(境内北西、先代一門) b 「武蔵国久良岐寺前村称名寺境内地位建

0000000

- の之図」より(明治 13 年、称名寺作成) **C•d** 北条実時公御廟の五輪塔(元からある3基)
- 北冬貞顯小御廟

a·b: 称名寺所蔵、神奈川県立金沢文庫保管 c:横浜市教育委員会 2002 『称名寺の石造塔』 より転載



指摘されている。

伝御所五郎丸墓

五輪塔 (西区御所山)

鎌倉後期のものと推定。

素材の天神山凝灰岩の分

布はまとまっているが、東漸

寺と本塔のみ離れた場所

に所在。長楽寺(群馬県太

田市) にも同素材の石塔

があり、無学祖元を通じた 交流も指摘されている。

国史跡称名寺境内歴代住職墓所



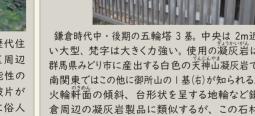
称名寺境内地北西に位置する鎌倉時代歴代住 職墓所の世代塔前の発掘調査で、調査区周辺 に小規模ながら人為的に造り出された可能性の ある平場が確認された。周辺に石塔類の破片が 散在したことから、歴代住職墓域の周辺に俗人 の供養塔を立てる場所が存在した可能性がある。

勝国寺吉良家供養塔

五輪塔 (南区蒔田)

4 基が並ぶ。このうち約 Im と

最大のものは、吉良政忠供養塔





鎌倉時代中・後期の五輪塔 3 基。中央は 2m近 い大型、梵字は大きく力強い。使用の凝灰岩は 群馬県みどり市に産出する白色の天神山凝灰岩で 南関東ではこの他に御所山の | 基(右)が知られる。 火輪軒面の傾斜、台形状を呈する地輪など鎌 倉周辺の凝灰岩製品に類似するが、この石材 では空風輪を結合するホゾ構造を有する。

伝畠山重保墓

五輪塔(金沢区白山道六郎ヶ谷公園)

高さ Im ほどの南北 朝時代と推定される安 山岩製の五輪塔。各輪 に四方の梵字を刻む。 当初の地輪は失われ、 復元されている。



711/1/ info 石材

南関東における 14 世紀までの宝篋印塔・五輪塔は 安山岩製が主体。鎌倉周辺では凝灰岩(三浦)併用。

- ①箱根・伊豆山の安山岩
- ②神奈川県鎌倉市~千葉県富津付近三浦層の凝灰岩 (鎌倉石、房州石)
- ③東京都あきる野市産の凝灰岩質砂岩 (伊那石)
- ④神奈川県厚木市産の火山礫凝灰岩(七沢石 ⑤ 千葉 世 鴨川 市産の 蛇 紋 岩
- ⑥千葉県銚子市産の砂岩 (銚子砂岩)
- ⑦群馬県産の安山岩
- ⑧群馬県みどり市産の凝灰岩 (天神山)
- ⑨埼玉県長瀞町・小川町産の緑泥片岩
- ⑩茨城県つくば市産の雲母片岩
- ⑪茨城県つくば市産の花崗岩

※鎌倉時代に北条時宗の招きで南宋から渡来した臨済宗の僧。建長寺に住し、円覚寺を開山。

牛馬六畜供養塔 文和元年(1352) 宝篋印塔(金沢区上行寺)市指定有形文化財

横浜市内にみられる宝篋印塔は 近世のものが多いが、上行寺の 「牛馬六畜供養塔」として知られ る宝篋印塔は、紀年銘こそ削られ ているが、干支の壬辰から文和元 年 (1352) と推測されている。牛 馬を用い六浦から鎌倉へ運送する 商人により建立されたとみられてい る。反花座は下記表D類にあたる。 こうした安山岩製の宝篋印塔は 14 世紀中葉において定型化し、生産・ 流通の隆盛期を迎える。

info

反花座

O UU UU UU O

 $Q \Psi \Psi Q$

NO MODELL

千手牌 (14/第2

安養院 (1308

3 - 4 - (1 - 2 - 5 - 6

称名寺81 (推定1)

CHIMINE CHIMINE

複弁 D 素面・框有:

無量光寺

上行寺 (135

本間岳人 2012 「南関東」『中世石塔の考古学』より転載

左頁c 実測図 1,2 が最も古いタイプの反花座被弁 Aa(上図)

称名寺A2 (13c第4)















糟屋清印父母供養塔 元亀 4年(1573) 宝篋印塔 (青葉区石塔坂)

宝篋印塔2基、五輪塔2基が並ぶ。宝篋印塔の基礎に刻まれた 内容から糟屋清印が両親の 13 回忌で法華経 1000 部を読み供養 し、五輪塔を建立し、その後宝篋印塔を建立したとみられている。 右2基は母妙永、左の2基が父道印のためのものと考えられている。



笠原氏墓所 宝篋印塔 (港北区雲松院) -番古いもの (左から3 番目) で元和 9 年 (1623) で

新しい時期の宝篋印塔 は笠が外側へ開き、宝 珠は頂部が突出する等、 3 頁で示した特徴がみら れる。





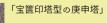


五輪塔·宝篋印塔 🐰 庚申塔

右の五輪塔は野路家の屋敷神である。 稲荷社祠前の江戸時代前期につくら れた「五輪塔形の庚申塔」ですの地 輪に刻まれた銘文によって明らかに なっています。同様に、宝篋印塔型 をした庚申塔もあります。こうした ものは、庚申塔が盛んに造られるよ うになる寛文年間以降より前につく られたものであり、庚申信仰を考え る上でも貴重なモノです。







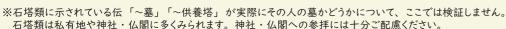
宝泉寺(鶴見区菅沢) → 銘文に「庚申本地薬師」 買永10年(1633)

庚申に関わる年銘がわか る石造物として県内最古



寛文元年 (1661) 塔身三面に猿の像 山平信仰を表す 銘文に「奉新造庚申





五輪塔は「五輪率都婆」「五輪石塔」等とも表記され、当時から「塔」とも「率都婆」とも表していたようです。両者は 本来同じ意味を示し、インドの「ストゥーパ」という語を音写したか、漢訳したかの違いです。

「塔」は本来ブッダの遺骨である仏舎利を納めた仏塔と関連するものです。ストゥーパとはサンスクリット語で「高く頭れる」という意 味で、涅槃の境地を象徴しています。仏教がアジア各地へ伝播するにつれ、ストゥーパを祖形としながら特色のある多様な仏塔が生 み出されました。スリランカのダーガバ、ミャンマーやインドシナのパゴダ、チベットのラマ塔、中国・朝鮮・日本の層塔 (三・五・七重塔) な どです。2019年待望の末、世界遺産に登録されたミャンマーのバガン遺跡の映像が記憶に新しい方も多いのではないでしょうか。 緑の中、にょきにょきと突き出し幻想的な風景を形作るあれらが、寺院と多くの仏塔なのです。



製作技術~矢穴技法

石塔類の製作

一般的に石塔類は石材産地周辺でほぼ完成品に加工され造立地に運ばれます。中世日本における採石・加工技術の 大きな画期として、矢穴技法の導入による硬質石材利用が活発に行われるようになったことが指摘されています。矢穴技法 とは、金槌と鑿を使用して、石に「矢穴」と呼ばれる穴を列状に掘りこみ、「矢」と呼ばれる楔状の道具を矢穴に差し込み、ゲ ンノウといわれる鉄製の槌でたたきます。すると、徐々に矢が石に食い込んでいき、ある程度食い込むと石に亀裂が発生し、 一気に割れるという工法です。

矢穴技法のルーツについては、その初期の資料が東大寺復興に関わった宋人石工集団の周辺に色濃くみられることが 指摘されています。これは平安時代末期の動乱期に、兵火によって罹災した東大寺復興を契機として、宋人技術者集団が 日本に招聘され大きな技術革新をもたらしたためと言われています。日本における矢穴技法の起源については、紀年銘資 料では、文応元年(1260)銘の奈良県大和郡山市の額安寺宝篋印塔が最古の事例として位置づけられると報告されてい ます。紀年銘のない資料ではもう少し古い時期のものも挙げられています。

塚と石塔類



塚と石塔類というと、「富士塚」と塚上に立つ 「富士講碑」が頭に浮かぶ人が多いのではな いでしょうか。富士塚は登山できない人の登拝 のために富士山を模して築いた人造の山で、富 士信仰を行います。類似の山岳信仰に御嶽塚 があり、富士塚と同様に山頂や山腹に石碑を 数多く立てます。こうした山岳信仰以外にも、塚 そのものが、信仰を具象化する造形物とみなさ れる場合があります。

金沢区富岡町堀口遺跡は、自然丘陵上の突 端のわずかに隆起した地山を四方から削り、 一辺約11.5m高さ約50cmの方形壇を造って います。壇上数か所で浄火を焚き、中心部では 敷石を伴う白色の施設をつくり、何らかの行法 を修し、付近にカワラケや銭など納め、その上 に封土し、何層もの粘土でこれを固めて盛土を

築いた修法壇と推測されています。

塚は墳墓として以外にこうした祭りや供養な どの信仰を伴い、塚の築造そのものが石塔類 と同様の意味を持っていたと考えられています。 庚申塚や二十三夜塚など、特定の信仰により 聖地とされ、利益や畏怖などさまざまなものを 帯びます。またそれは村境にあり、村落を守る 役目も受け持ちます。

現代にあって、木製塔婆や盛土がない石塔 や石塔の所在地を「つか」と呼んだりすること は、塚の築造も木・石塔類も同じ信仰表明の 手段として認識されてきた結果と考えられてい

実際には塚上に塚と直接関係のない石塔 類が設置されている場合も多くあります。開発 の中、なんとか救われた石塔類が、開発の渦 の中これまた何とか残った塚の上に移動してき たことが想像されます。

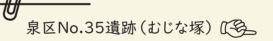
b 鍛冶ケ谷・中之村の富士講(同上)











泉区西が岡所在の「むじな塚」と称される塚は、周辺や裾部が削 平されているが残存状況から6~7m程度、高さ約1.5mの方形を 呈す塚と推定される。内部構造は確認されず、埋葬や人定に伴うも のではなく、経塚や修法塚の可能性も低い。築造時期は不明であ る。版築は施されず、短期間に一気に盛り上げたとみられ、塚上北 東部には、宝篋印塔と馬頭観音塔が各 | 基設置されている。これら の石塔類は他所からの移設であり、直接塚に伴うものではない。塚 の至近には「柏尾通り大山道」が通ることから「大山道」と関連が 強く、記念碑やランドマーク的な可能性が指摘される。

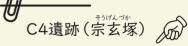


保木遺跡群 廿三夜塚

青葉区元石川町の丘陵尾根上に造られた北辺13m、南辺8.5m、 東辺12.5m、西辺9mの台形を呈する塚で、高さは4.8mと標高 94.5mの頂部からの眺望は良好であった。塚の下2層は黒色土層中 にロームと黒色土の混じった層、一番上はローム層のみで盛土され、 頂部は平坦であり、「廿三夜塚供養塔」の石塔が建立されていた。南 西裾部から頂上へ登る道があり、「月が半月の姿を現すとき、この日を 特別な日として行事を行った」廿三夜の月待信仰のため、元石川村内 の万願寺が導師となり、天保12年(1841)10月に築かれた。 (石塔は現在、保木薬師堂に移設)







都筑区大棚町所在の縄文早期・弥生後期・古代の集落跡の中央 部に近世の塚が検出されている。宗玄塚と呼ばれ、牛馬や犬猫な どの家畜の埋葬地であった。塚は南北約12m、東西約10m、高さ 約1m、形状は長方形を呈するが、変形し従来の形を残していない。 版築構造は施されておらず、遺物もみられない。

新編武蔵国風土記には「村の北の方にあり、塚のまはり三間ばか り、高さ五尺餘、古へそうげんといふ山伏を葬りし塚なりと云」とある。 塚上には安永10年(1781)の庚申塔1基、明治・大正期造営の馬 頭観音塔3基が設置されているが、塚との関係性は確認できない。





中世の埋葬方法

死屍

亡くなった人をそのまま放置。 坑を掘るなどの行為はしない。

地中 (坑) 死後処理

「周溝を持つ中世墓」 塚 「方形環濠莫 岩倉

地中 (坑) ^{焼き場と同}

地中 (坑) ^{焼き場と別}

地中 (坑) ^{石で覆う}

五輪塔

など

岩倉

木製 建造物

小堂宇や 木造塔、

特定場所

「土坑墓」

火葬十坑墓

火塟施設墓

「十坑墓

集石墓」

「配石墓」

周溝を持つ中世墓 方形環藻莫

看石墳墓

「十坑墓」

※旦体的な

「納骨遺構

「納骨堂」

★アアには重葬行為は含めたい

度埋葬するような洗骨も含めない。

十葬の場合で、頭蓋骨など特定の部位が集中して検出される例が

あるが、これらは一度十葬か風葬で骨化した後に集められ埋められ

このため、土葬や風葬した死者の遺骨を数年後に洗って清め、再

たとみられるので、再葬行為として、下記表には記載していない。

市中、寺、やぐら 吉松遺跡(大分県),東庄内遺跡(三重県) 山際、山懐

人骨、蔵骨器、石塔

出土遺物

(骨、銭、かわらん

丘陵

やぐら、寺

上台の山遺跡

火葬をする遺構

出十場所

蔵屋敷遺跡(鎌倉市)

上の山遺跡,杉田東漸寺貝塚 由比ガ浜中世集団墓(鎌倉市)

市中、山際、砂斤、寺

上行寺東やぐら群

由比ガ浜中世集団墓(鎌倉市)

丘陵

やぐら、寺

「荼毘遺構」「焼土坑」

「火葬土坑」「火葬跡」「火葬址」「火葬土壙」

※墓ではない火葬遺構もあるし、火葬と墓の共用の場合もある

お形の溝で区画された塚中央に

遺体を棺に入れて地中に埋葬

遺体を甕に入れて地中に埋葬

遺体を棺に入れ焼いた後にその

火葬した人の骨を焼いた坑で

坑にそのまま埋葬する

:は別の坑に埋葬。有機質容器

ある。埋葬施設は様々。 蔵骨器には①土器(陶磁器含)②木製品(木製の箱)がある 上行寺東やぐら群

火葬した人の骨を容器に入れた 後に方形の溝で区画された塚に

上の山遺跡、歳勝土遺跡 火葬した人の骨を拾い、容器に

火葬した人の骨を拾い、容器に 入れた後に堂や廟に埋葬する 法華堂や菩提寺の廟

火葬後に堂や廟へ、特定の場所 へ骨の一部を納める。

「廟堂」「骨堂」 納骨と酵骨を考古学的に区分するのは難しいが、納骨とは、通常の個人の墓所ではないところ(霊場や共同納骨所など)へ 骨の一部を奉安する行為で、墓への蔵骨とは区分されている。また、納骨ではなく分骨も中世には行われていた。

~十莚と火莚~

は遺構や遺物として残る場合

は遺構として残る場合

(涂中経過)

は考古学的検証が困難なもの

> 中世の葬法はさまざまなものがありますが、 実際に発掘で検出されるものは、土葬と火葬 で、風葬などは考古学的実証が困難です。

> 遺体を火化するという行為はすでに縄文時 代から類例は知られていますが、「火化後に 骨を拾い、蔵骨器に納め、さらに土中に埋納 する」という一連の作法の火化行為を「火葬」 と呼ぶならば、火葬の始まりは奈良時代に

は日本の広い範囲で火葬行為が浸透してい ますが、平安時代に入ると急速に姿を消し、 中世に再び流行します。その背景には舎利信 仰と山上他界観による霊場への納骨信仰が あるといわれています。

全国的に中世後期には火葬施設の存在が 目立つようになります。群集する形で丘陵部 に多数造営された火葬を行ったであろう遺 構は、「火葬土坑(壙)」「火葬土坑墓」「火 葬施設(墓)」「茶毘遺構」「焼土坑」などさ 入ってからといわれています。8世紀後半に まざまな名称で報告されていますが、そこが

墓として認識されていたかは判断が難しいと 言われています。つまり、土器などの共伴遺 物が供献用とみられても、火葬の跡を供養し ただけとも考えられます。また骨の大半が 残っていても拾骨の際に、拾い漏れがあった り、あえてごく一部のみを拾った可能性もあり ます。骨があった場合、火葬した場所にその まま埋葬したということもありますが、火葬墓 の一般的な形態は、荼毘に付された後に拾 骨を行い、蔵骨器に納め埋葬したものが火 葬墓の一般的な形態です。

残る骨 残らない骨

日本列島は火山灰性の酸性土 壌が優勢であり、貝塚や砂丘にあ る遺跡、甕棺や石棺による埋葬施 設、低湿地遺跡などを除き、一般

的に骨の保存状態は良好でなく、土中に残りません。

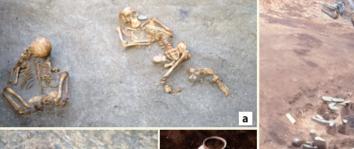
では、火葬骨など、焼かれた骨の残りはどうでしょうか。 火葬骨の骨質は堅牢でそのもの自体はよく残ります。た だ、火葬により、脱灰し細かく割れている、ひどく変形して いるなど、骨から得られる情報は非常に少なく、そういった 面での資料的価値は残念ながら乏しいのです。

中世の人骨でもっとも保存状態の良いものの一つに鎌 倉市由比ヶ浜中世集団墓地遺跡があります。この遺跡は 砂丘上にあるため、土壌の粒度が細かい砂で、水はけが 良く、人骨の残存状態が良好です。

人骨の保存状態の良し悪しを決める要因の中に、人体

や人骨そのものの要因以外に、埋蔵環境

の特性も大きく関わってきます。①水分の有無、②土壌の **タイプ、③温度、④酸素**等に影響されるとされています。① では乾燥状態か水浸状態かで大きく異なり、水浸状態と はいわゆる低湿地遺跡であり、こうした湿潤状態において は植物質資料も多く残ります。②ではpH値、粒度、土壌成 分が大きく関係してきます。先ほどの砂質状態による水は けの良さでもわかるように、①と②は関係し、特に土壌の 含水量とpHは有機質遺物の保存状態に大きく関係してき ます。また、③は10℃上昇するごとに2倍の速度で腐敗が 進み、④では初期の腐敗には酸素が必要であるため、酸 素不足の状態だとかなり進行が遅れるようです。この代表 例が甕棺での埋葬です。基本的に密閉空間に納められた 遺体の腐敗は酸素不足のため遅れがちとなり、石棺や木 棺などの他の棺のものと異なるそうです。











g

11・12号 人 骨(12号は頭位に銅鏡 **b** 寺尾城跡遺跡 火葬址(T字形状(煙道) C 歳勝十遺跡

蔵骨器と蓋石(緑泥片岩の板碑片) d~h 上の山遺跡

d~f 41号墓坑出土状態 d薪と副葬品 e銭 f握り飯 **g** 西中世墓地 h 積み石遺構(五輪塔火輪片出土

(葬送儀礼に伴う祭祀遺構) • **j** 上台の山遺跡 ▮ 方形環濠墓 ▮ 蔵骨器

a 鎌倉市教育委員会提供

~納骨信仰と五輪塔~

火葬は奈良時代の僧、道昭により始まる とされ、各地で受容されますが、平安時代 には下火になります。中世に再び流行した きっかけには、舎利信仰や霊場への納骨 信仰があったとの説があります。

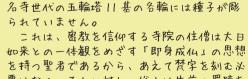
d

納骨とは骨の一部を個人の墓所とは別 の場所へ納めることを言います。霊場や集 団納骨施設へ火葬骨の一部を納める行 為が、納骨穴のある五輪塔の広がりにも みられ、火葬骨の各地への受容ともみら れています。

横浜市金沢区朝比奈町に隣接する一帯 に朝比奈砦遺跡(鎌倉市十二所)があり ます。「朝比奈砦」とは、朝比奈切通周辺 山中の広大な範囲にある切岸状の崖や 平場等の防御関連施設とみられる多くの 遺構を指します。

この遺跡の一角に、三方を切岸に囲まれ た人為的な平場から、中世の納骨堂とそ れに関連する施設が見つかっています。泥 岩で版築した基壇の上に、一辺6m、三間 四方の礎石建物が構築され、建物中心部 の基壇上には内部に火葬骨を充填した常

滑の大甕が埋められていまし た。出土状況から、甕内部の い、再び火葬骨を埋納する継 続的な追納骨行為が想定さ



梵字が不可欠だと説がありますの



鎌倉市教育委員会提供

五輪塔の中には梵字が刻まれている ものとそうでないものがあります。一

説に梵字があるのは俗人の墓塔、ないものは

僧侶の墓といわれています。P.4で紹介の称

【マメマメ知識】

要はなく、それに対し、俗人は生前の罪障を 取り除くため極楽浄土への約束手形のような

近世の石塔 stupa in recent times

近世の石塔類は横浜市内で数多くみられ、身近な石塔類と言えます。信仰の大衆化により、 東東塔をはじめ、馬頭観音や道和神、富十講や御嶽講、出羽三山などの山岳信仰の供養塔

そのため数が多く、すべてを取り上げることはできませんが、ここでは戸塚区の旧川上村(平戸、 柏尾、舞岡)の石塔類を中心にその一部を紹介します。『横浜市文化財調査報告書 戸塚区石造物調査報告書』(3分冊)では 戸塚区だけで693基もの石造物が紹介されていますが、記載されていないものもあり、その数はさらに多いと思われます。











世 近世庚申 からの Ō 板 続性ははっき 的 が中近

された三尸 寿命が縮められ 近世の庚申塔は、 基づき、 ħ 天帝 た や現世来世の を防 の 0 成就により 「三尸説」 o) 晩は るの 調 寝

に伴い 「三だり 思2 -塔とは 建て 庚申 想に伴 十二支の 民間信仰 呼ばれる た石塔で 庚申日に、 仰のこと 人間の の 庚申信仰と 徹夜で講を 内に住みつ えられて もとは道 申 日 の 夜

庚

申

塔





寛文2年(1662) 元禄4(1691) 10月 11月大吉 b 舞岡町③ f 川上町④ 舞岡町3109バス停脇 熊野神社 →周辺へ移動 元禄7年(1694)

品濃町518-6

※町名後ろの番号は [□]横浜市文化

財調査報告ョの番号と一致します

3月吉日

寛文2年(1662) 10月26日 10月吉日 **C** 舞岡① g 平戸町 舞岡町946 品濃一里塚(平戸町側) 舞岡八幡宮入口 宝暦3年(1753) 品濃一里塚(平戸町側) 寛文6年(1666) h品濃町②

10月13日 d 柏尾町⑤



j 舞岡町 坂下口 寛政7年(1795) 9月吉日

K品濃町③ 北天院境内 寛政12年(1800) 4月吉祥日

平戸町(4) 白旗神社脇会館脇 平戸町199 宝暦4年(1754) 文政3(1820) 3月









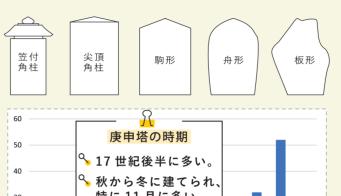
特徴を知れば

石塔調べが面白くなる/



戸塚区内の庚申塔 179 基、比べてみました

左頁の庚申塔の写真は上から年代順に並んでいます。 形態や庚申塔に彫られたものなど、変化や特徴を見てみよう!



特に11月に多い。 2月 3月 4月 5月 6月 7月 8月 9月 10月 11月 12月

庚申塔に彫られたもの

像を彫ったものや文字だけなど、建立 時期で特徴。

仏像→青面金剛像→文字 (像塔→文字塔へ)

🍑 最初の頃は青面金剛像以外の帝釈天や 阿弥陀如来像,



() () 阿弥陀如来

💊 日月 , 鶏 , 邪鬼 , 三猿など。 三猿は高頻度で彫られる。 日月 = 55、鶏 = 23、邪鬼 = 33、 三猿=116

戸塚区内石造物 693 点中、庚申塔は 179 点で、全体の

26% を占めます。石造物の中には手水鉢や鳥居等も含ま

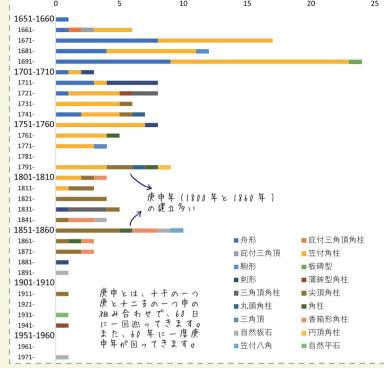
れるため、こうしたモノを除けば、庚申塔はさらに高頻

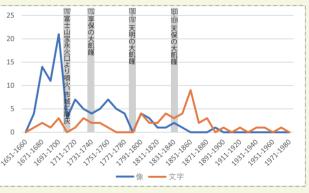
度でみられる石造物です。町内によっては庚申塔が約半

庚申塔形態分類

古…舟形や笠付角柱が多い 庇付は古い時期のみん 新…頂部が尖ったり香箱形 の角柱、自然板石。

年間で 18 回の 庚申待ちを続け た記念に庚申塔 を建てました。





偏 石浩物は終済的にも精神的にもある 程度ゆとりがないと建立できない

上倉田町36 蔵田寺 明暦2年(1656)

戸塚区内で最も古いものは、上倉田町の舟形の庚申塔で、 (1656)11 月吉日に建てられました。本尊には地蔵立像が浮彫され、 また上部には阿弥陀三尊種子と合掌坐像の浮彫が 2 体みられます。初 期のこうした青面金剛像以外の仏像は、庚申信仰を広めた各宗派の僧 侶の考えがあったと考えられています。



Q

数を占めるなど、身近な石造物と言えます。

十干は甲・乙・丙・丁・戊・己・庚・辛・壬・癸の 10 種類、十二支は子・丑・寅・ 卯, 臣, 七, 未, 申, 酉,

戌・亥の 12 種類から なり、これらを合わせ / 干支という。 還暦で赤いものを身 に着けたり送ったりす るのは、60歳のときに自 分が生まれた年(0歳) の干支に戻るという意味。

※2道教

道教は、仏教、儒教と並ぶ中国の三大宗教の一つ。 多神教であり、その概念規定は確立しておらず、さま

道教の上尸・中尸・下尸の三尸の精霊。人の体 内にいて、その行動を監視し、庚申の晩、人が寝 静まった後に体を抜け出し、天に上り、天帝にそ の人の行動を報告する。その際に、悪事や罪科が 報告されると寿命が縮められる。

左直写真の中に大丁が隠れているよの探してみよう。

(左から上尸・中尸・下尸)

イラスト:諸川摩美

石塔類の中には、道傍に在るもの以外に、お寺や神社、私有地に在るものも多くみられます。訪れる際には十分ご配慮ください。

神

元 らの疫病や

祖 橋の袂などで防ぐ神で 人間界とあの世 の

地域は東日

降に造

なぜ2体?

風邪と 道祖神塔の形態には、 双体立像、单身坐像、 文字があり、男女の双



a 舞岡町 薬師堂前

> b舞岡町® 舞岡町970宮下橋脇 明和8年(1771)正月吉日

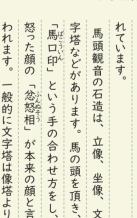
C 品濃町② 安政3年(1856)正月

d川上町⑦ 能野神計 宝暦13年(1763)4月吉日

e舞岡町32 舞岡町3109バス停脇 →周辺へ移動 天保12年(1841)正月吉日

道祖神祭り

小正月に「サイト払い」や「サイト焼き」、「ド てるところも多い。こうした内容は定義長とい う小正月の火祭りの行事と習合する。



救う ための姿を表した 親音様で 牛馬の守



頭観音は、 畜生道に落ち

頭 音

の 遊ぶ所 仰も

祭礼と石

道祖神塔以外に、無名の丸石や石塔の脇に祀られたマ

「セイノカミノオスガタ」、「セイト」、「ゴリンノイシ」、

などで覆ったり、火の中に投入する事例もみられる。

「イシ」などと呼ばれ、祭場の中央に出し正月の飾り物

俗に「セイノカミ」が宿っているといわれ、

③五円玉や土製品など、昭和の遺物 がパラパラと出てきます。道行く人た

②台座が埋まっているので、掘り出します。 石塔の下の台座と年前側にも石座

が顔を出します。

①輪郭を出すため、周辺をきれいにしま すの側面や裏面は竹の根に覆われ、ず ちがお供えしていたようです。



れいに掃除します。笠の上面 の糞もきれいにしました。 笠の上部構造もよくわかります。

11出現!

b



の丈夫な楮紙で再度トライ。成功です。 水の出の良い霧吹きで吹き付け、やわらかい 馬毛のプランでたたき、余計な空気を押し出し、 ⑤画仙紙を貼り付けます。 通常、土器の拓本をとる紙 紙と石塔を密着させます。 厚みや伸び



②天候不順や立地場所によって、なかなか乾かず墨が打てません。 ル分が多すぎると、墨がにいんでしまいます。そこで、最終兵器、ド ライヤーでする電気もひっぱります。



⑨二つのタンポを擦 り、色を確認しなが ら、少しずつ墨を のせていきます。 細かいところは 小さいタンポ でうちます。

O. なぜ猿や鶏が彫られるの? Q Search

聞か猿

三叉戟

臂や八臂のものも))、手に戟、 羂索、剣、弓、矢、斧 などを持つ。持つ位置は一定 の傾向があるものの様々。

≪日・月≫

言わ猿

「左に日,右に月」…30基 「左に月,右に日」…25基

塔の浮き彫りが見づらくなって

しまっているため、拓本をとり

【拓本】

調査してみました。

鶏は夜明けを告げるため。 庚申の夜が申の日から始まり 酉の日に至るため。

政

吉日

載内容に基づく。

≪三猿≫

中国の孔子の『論語』に由来。 室町時代に信仰の厚かった山王社 で、猿は神の使者や守護神として

≪邪鬼≫

青面金剛像の足元に踏みつけら れ、うずくまる。『陀羅尼集経 第 9 巻大青面金剛呪法』の記

塔未や台石に彫られる。 神聖視されていたため。











f 上矢部町⑯ j 柏尾町⑦ 上矢部町2343 前不動 元禄16年(1703) 大正6年(1917) 12月朔日 1月

g 平戸町 平戸町583 天保4年(1833)

h上矢部町^⑬ 上矢部町2343 天保9年(1838) 12月吉日

▮ 上矢部町⑬ **上矢部町2343** 嘉永6年(1853)

川上町② 川上町536 昭和40(1965) 10月

K柏尾町4

昭和18年(1943)

成正寺

8月吉日

道と石塔類

石塔のあった場所

現在、庚申塔は寺社の境内や私有地などで見かけら れます。これらは元あった場所から移されたり、また、 交通量の少ない脇街道にあったため、開発などによる 第れたものなどが多くあります。 明治時代になる と、庚申信仰は迷信とみなされ、政府はその撤去を進め、 さらに高度経済成長期以降の道路の拡張整備工事など により、多くの石塔が姿を消してしまいました。

本来、庚申塔は村境や辻などにありました。 剛や猿田彦が本来持つ機能により、他所から禍や病魔 が集落内に入り込まないように、集落入り口の路傍や 集落を望む後背地の山腹などに、無病息災と災厄退散 を願い祀られていることが多かったのです。道祖神も同 様に、路傍や分岐点、村の辻に祀られ、通行の安全や 他所からの疫病や災いを塞ぐ神として信仰を集めていま した。

△ 庚申塔と道標

P.10-h

かながわ考古学財団 の旧野庭高校

カシミールスーパー地形を元に地図を作成

斎藤家 • P.10-a

※図中の「P.◆-◇」は写真掲載頁◆とキャプション◇です。

■ 庚申塔

道祖神塔

□ 庚申塔

■ 馬頭観音塔

山王塔

| 道和神塔

□ 馬頭観音塔 □ 地神塔 □ 地蔵塔

□ 不動明王塔

富士仰碑 □ 山岳信仰碑 □ 三山供養塔

宝篋印塔

□ 大禄天塔

天狗塔 石祠

二十三夜塔

道道標

庚申塔の中には道標を兼ねている例がみられます。 戸塚区内では 12 例あり、左右に文字がみられます。 戸塚区内の道標銘のある庚申塔の一番古いものは元文 2年(1737)のものです。道標銘が付された庚申塔は、 18世紀後半以降に急増します。この時期は庚申塔の造 立が減少していた時期です。こうした背景について、 石塔の新規造立禁令が幕府から幾度となく出されてい る件が挙げられています。村単位での造立に変化した り、こうした道標へと変えることにより、庚申塔に道標 としての「公的役割」を担わせ石塔建立を認めさせよう としていた可能性も指摘されています。

馬頭観音と道

馬は当時、農耕や輸送などの重要な働きをしたため 大事にされ、馬の無病息災を祈る信仰が生まれました。 馬とともに道中の安全を祈ったり、また道半ばで力つき た馬の供養に祀られるようになったとも言われます。こ のため、道筋に馬頭観音像がよくみられます。

こうした「馬と畜類の安全」を願って建てられるよう になるのは、奈良時代半ばに日本に馬頭観音が伝えら れてからかなり後の室町時代辺りからだとの説がありま す。仏教本来の強力な馬頭観音の神呪の力を示す忿怒 の形相から、優しい顔立ちのモノがあるのは、日本人 にとっての馬そのものに対するイメージの違いがあった とも言います。

近世に入ると、馬の守り神として配されるようになり、 特に江戸時代中期以降にその数は急増し、祈願の内容 は馬の供養以外にも馬に係る商売繁盛など多岐にわた りました。馬頭観音は生活を支えてくれる馬の守神と なった変化がわかります。





年(1748)10月吉日 h 無岡町 舞岡町4415より移設 元文2年(1737)9月

〈左塔右側面〉ぐめうじ道〈右塔右側面〉ぐみようじ道 〈左側面〉此よりかまくらミち〈右側面〉此よりぐめうじミち

家の周りの 石造物を 調べてみよう

~横浜市教育委員会による石造物調査報告~

※市域の石造物調査については1962年(昭和37)から横浜市文化財調査研究会 が、1976年(昭和51)からは横浜市文化財総合調査会石造物調査団が担当して おり、以下の出版物が刊行されています。(市内の図書館にてご覧になれます。)

『横浜市文化財調査報告書 第六輯 保土ヶ谷区金石誌―採集碑石一覧―』(現:保土ヶ谷区、旭区) 横浜市文化財調査報告書 第六輯拾遺 「保土ヶ谷区金石誌」拾遺・付正誤表』(現:保土ヶ谷区、旭区)

港北ニュータウン内金石文』(現:港北区、緑区の一部)

横浜市文化財調査報告書 第七輯 金沢区金石誌』(現:金沢区)

浜市文化財調査報告書 第十輯 金沢区金石誌(その二)』(現:金沢区)

黄浜市文化財調査報告書 第十一輯 金沢区金石誌(その三)』(現:金沢区)

横浜市文化財調査報告書 第十五輯 金沢区金石誌(その四)』(現:金沢区)

兵市文化財調査報告書 第十二輯 磯子区金石誌(その一)』(現:磯子区)

第二十一輯の二 緑区石造物調査報告書(二)』 横浜市文化財調査報告書

横近市文化財調杏報告書 第十八輯 泉区石诰物調查報告書

第二十二輯の一 戸塚区石造物調査報告書(一)』(現:戸塚区)

横浜市文化財調査報告書 第二十六輯 栄区石造物調査報告書』(現:栄区)

横浜市文化財調査報告書 第二十七輯 西区石造物調査報告書』(現:西区)

『横浜市文化財調査報告書 第二十六輯 瀬谷区石造物調査報告書』(現:瀬谷区)



開発の激しい横浜市で すが、市内にはまだ多く の石造物があります。

庚申塔を中心とした石 造物は非常に多く、本冊 子で全てを取り上げるこ とはできないため、本の ご紹介をさせていただく ことにしました。

左に紹介した本では、 石造物が区ごとにまとめ られています。市内の図 書館などで閲覧できま

すでになかったり、位 置が動いている場合も多 く散見されますが、調べ る際には是非ご活用くだ さい。





